剣に生きる者は、剣で滅ぶ

桑の華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
剣に生きる者は、剣で滅ぶ

【Ｎコード】
Ｎ９４２１Ｊ

【作者名】
桑の華

【あらすじ】
腹違いの兄弟レインとエレオス　そして３人の仲間が、悪の組織シャドゥ団と戦うバトルファンタジー　ちょっとコメディーもありますっ

過去の出来事

「えー、次の問題はテストに出てくる1年生の時の復習問題だ。それじゃあ問1の問題を解いてもらおう。……ではレイン、答えなさい」

僕は数学の先生にあてられた。でも僕は今、机につっぷして無視している。授業なんてやってられるか。

「……レイン」

何度呼ばれても僕は全く反応なし。そんな僕を後ろの席にいるエレオスが教科書で頭を思い切りバシンと叩いてきた。

「痛いっ！　な、なんだよエレオス……」

僕は痛みと驚きでガバッと起き上がる。

「無視してねえでさっさと答えろよっ。こんな簡単な問題もわかんねえのか？」

――自分だってわからないくせに。

「あと。センセイがお怒りのようだけど」

「え？」

僕は先生の方に目を向けた。――鋭い眼光で僕を睨んでいた。僕の背筋を冷や汗がつたう。授業が終われば、即説教タイムだな。

「ほんと馬鹿ね、先生の言葉無視するなんて。これで何回注意されたと思ってるのよ」

エレオスの隣の席に座っているセティアが頬杖をつきながら呆れたように言った。

さあ――何回目だっけ。

こんな僕の名前はレイン・ユネーヴァ。レック島という世界地図にも載っていない島の、とある中学校に通っている2年生だ。

そして僕の頭を叩いたのは、エレオス・ユネーヴァ。僕の腹違いの兄であり、不良学生だ。不良学生、と聞いていいイメージが湧くはずがないのだが、それでも根はいい奴。

そしてもう一人、エレオスの隣の席にいるセティア・ユネーヴァは、僕らの友人でありクラスの学級委員。ちなみにセティアは、さっきも言った通り僕らと同じ名字の“ユネーヴァ”だ。親戚なのか、赤の他人なのかはわからない。

――それにしても、セティアから注意を受けたのは、これで何回目だろう。何だか違和感があるというか、なんというか。

すると、学校のチャイムが鳴った。

「よっしゃあ、これで授業終わったぜー！」

エレオスは鞄に教科書やノートを強引に押し込み、扉の方へかけよった。

「じゃ、お先に失礼っ」

エレオスはこれからある掃除もサボり、教室を後に走り出した。授業もまともに受けず、おまけに掃除まで放棄――いつものことではいえ、先生が怒らない訳がない。

「こらっ！　エレオス待ちなさいっ！」

「誰が待つかよ、このクソジジイ！」

教師に向かって、挑発的なこの発言。エレオスだからこそできる行為だ。

「あっ、待ってよエレオス！」

僕は鞄に荷物を押し込み、エレオスの後を追った。なんだかんだで僕も不良学生の一人。

「二人ともっ！　何度言ったらわかるんだあっ！」

先生の怒鳴り声など気にせず、僕とエレオスは廊下を走り、階段を降り、外に出た。

すると、3階の教室からセティアが叫んだ。

「あんた達、どうなっても知らないわよ！」

そんなことは、百も承知だ。僕らは気にせず、家まで走り続けた。

「あ、2人ともおかえりなさい」

出迎えてくれたのはエレオスを師匠と慕っている、11歳のジグ

ルズだ。生まれてから間もない頃に捨てられた孤児であるため、名字がない。どうやら生まれたときから1人で生きてきたらしく、ジグルズが6歳の頃に僕らと一緒に生活し始めた。
ちなみに、僕とエレオスも物心が付き始めた頃に捨てられた孤児である。
「あー疲れた……もう、走るの速すぎエレオス」
元々、運動嫌いで体力のない僕は走ったせいで疲れ果ててしまい、ベットの上に身を投げ出した。
「お前が遅いだけだろが、もっと体力つけろよ。……ったく、男のくせに運動が嫌いだなんて、ありえねえな」
「なんだよそれ、当たり前みたいに言うなよ」
「男に体力があるのは当然だと俺は思うがな。お前はどう思う、ジグルズ」
「はい？」
聞いてなかったようだ。
「だから、男に体力があって当然だと思わないかって聞いてんのっ。人の話を聞け」
「はっ。す、すいません！　えーっと……なんだかんだ言って俺も運動神経ないですし、男に体力がなくても普通だと俺は思いますが」
エレオスの顔が歪んだ。自分の意見に同意するとでも思ったのだろうか。
「……要するに、俺の言うことは正しくないと？」
「そ、そういうわけじゃないですが……」
「じゃあどういう意味だ？」
ジグルズは戸惑っている。エレオスは無理矢理すぎだ。
「……まあいいか。何でもかんでも俺だけが正しいってわけでもないしな」
お、珍しい。自分から降参するなんて。
「珍しいですね、エレオスさん」

「うるせえな……着替えてくる」
そう言って、エレオスは制服のブレザーを脱ぎながら、自分の部屋に入ってしまった。
「じゃあ、僕も着替えてくるよ」
「うん。わかった」
すると、玄関の扉をノックする音がした。
「はいはい。どなたですかー」
ノック音がするなり、ジグルズはすぐに玄関へ向かった。僕はそのうちに自分の部屋に向かう。
「……やっぱりセティアか。まあ入って」
ジグルズの今の言葉で、僕は思わず足を止めた。
学校はもう終わったようだ。セティアが学校が終わってから僕らの家にくることは、珍しいことではない。
「あんた、まだ制服なんか着てるの？　ほんと遅いわね、さっさと着替えてきなさいよ」
セティアは僕の姿を見るなり、うざったらしい口調で言った。
学校が終わったばかりだというのにもかかわらず、すでに家に帰って服まで着替えて、僕らの所まで早々とくるセティアは、生意気だが、学級委員に相応しい人間だとつくづく思う。
「お前が早いだけだよ……言われなくても着替えてくるって」
僕は仏頂面で自分の部屋に向かった。まったく、余計な世話だ。
僕の部屋の扉が閉まると同時に、エレオスの部屋の扉が開く音がした。
「なんだ、セティアじゃん。相変わらずやることが早いな」
「そうかしら？　あたしは普通だと思うけど」
扉越しに、エレオス達の会話が聞こえてくる。
「紅茶でも淹れるか」
「結構よ。用が済んだら帰るから」
――用？
「……用ってなんだ」

「ちょっとね……さっきあんた達、いつもみたいに掃除サボって帰ったじゃない？　その後の帰り学活の時、先生から連絡があったんだけど……黒髪でボロボロのマントを着た男と、そいつの手下らしき人物達が、隣町で暴れてる事件があったらしいのよ」
えっ――。
「ま、まじかよ」
「まじよ。それで、目撃者が言ってたらしいんだけど……その黒髪の男が、『エレオス・ユネーヴァはいないか』って言ってたって」
「……俺に、用があったのか」
エレオスに用――いったい何だろう。
僕は着替え終えたので、扉に耳をあてて会話を聞くことにした。
「心当たりとかないんですか？　エレオスさん」
そこでジグルズがエレオスに尋ねた。
「どうなのよ」
エレオスは、数秒黙り込む。
「ある」
セティアとジグルズの、息を呑む気配が感じられた。
「だ、誰なの、その連中はっ」
「……“シャドゥ団”という組織だ。黒髪の男は、その組織をつくった張本人、“ブラック・シャドゥ”。そいつらとは、１度だけ関わったことがあるんだ」
シャドゥ団――いったいエレオスと、どういう関係なんだろうか。すごく気になる。
「俺が小５の時、シャドゥ団と出会った。ブラックは突然俺に、仲間になるように命じてきたんだ。……当時、餓鬼だった俺に仲間になれなんて、おかしいと思わないか？　とりあえず俺は、こいつらと関わるのはまずいと思って、断ったんだ。そしたら、次にブラックは、なんて言ったと思う？……従わなければ、レインを殺すと言ったんだ」
いきなり僕の名前がでてきた。しかも――殺すだって？

「こ、殺すって……シャレにならないじゃないっ」
「もちろん、シャレにならない。俺は慌てて仲間になることを承知した。それで数時間、シャドゥ団と行動してたら……2人の手下の会話が聞こえてきたんだ。『本当に殺すわけがない。ただの脅しですぐに承知するなんて、やっぱり餓鬼は餓鬼だ』ってな。俺はその言葉を聞いて、即刻シャドゥ団を裏切った。それに、ムカついたよ。手下のあの言葉……死んでも忘れねえ」
良かった――その言葉を聞いてなかったら、今頃エレオスはどうなっていただろう。
「でも、それ以来会ってないし、今更何しに来たんだ？」
「たしかに、それがわからないわよね……」
と、その時。飛行機のジェット音ごとく、大きな爆発音が外で轟いた。同時に地面まで大きく揺れる。僕は扉に激しくぶつかった。
「なっ……何だよ今の！」
エレオス達が玄関まで走っていく足音が聞こえた。慌てて僕も部屋を出て、後を追う。
玄関の扉を開けた瞬間、僕らは目の前の光景に、己の目を疑った。
「……おい。何の冗談だよこれは……！」
辺り一面、荒れ地と化していた。

過去の出来事（後書き）

初めての投稿です
もっと上手くなりたいので、感想などお待ちしてます～
批評は大歓迎ですっ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9421j/

剣に生きる者は、剣で滅ぶ

2010年10月9日06時57分発行